

# クルヴェルのアタッシュケース

——読書ノートと読書リスト——

鈴木大悟

## I. はじめに

そのアタッシュケースはルイ・ヴィトンの革張りで、奇妙なイラストや落書きで表面が覆われている。いつも持ち歩いていて、みずから命を絶った時、亡骸の傍らにあったらしい。友人の手を介して現在の所蔵となったものだ。1930年代の彼の道具箱といった感が否めない。手書きやタイプ原稿、雑誌の切り抜きや私信、占いまで入っている<sup>1)</sup>。

それはルネ・クルヴェル（1900-1935）のアタッシュケース。同世代のブルトンやアラゴン、ツァラやエリュアールに比べるとビッグネームではない彼の名を、あのダリの親友だったと聞いても、思い出すひとは多くないただろう。辛辣で比喩に満ちた不思議な作法の小説の書き手だった。ヴァレリーの『精神の危機』の向こうを張ろうとしたエッセー『理性に反抗する精神』や、フロイトとマルクスをみずからの生を通過させることで接合しようとした理論書『デイドロのクラヴサン』などによって、シュルレアリスム運動のスポークスマンたりえた。

彼が男性と女性の両方を愛したこと、共産主義陣営とシュルレアリスム陣営を共闘させようと尽力し、自殺したこと。クルヴェルには、文学では

---

1) *Patrimoine des bibliothèques de France*, vol. 1, édité par Banques CIC pour le livre, fondation d'entreprise, ministère de la Culture et Payot, 1995, p. 231.



図版 1 Photo J.-L. Charmet 出典脚註 1 参照

なく生にまつわるそんな神話が、シュルレアリストであるだけに、つきまとう。そしてそのことがおそらく、クルヴェルの小説や理論の持つ魅力や可能性を、語りづらくしてきたのだろう。それがいけないとは思わない。これまでのクルヴェル研究は、作家の激烈な家族関係や実人生を強調し、作品をその表れとする論調が主流であった。こうした研究の現状が、彼の死後から大分たった今でも、あまりかわらないようにみえるということだ<sup>2)</sup>。

筆者はこれまで、既存の「神話」に逆らうクルヴェルの可能性とは何か、考察してきたつもりだ。主にクルヴェルの残したアタッシュケースのなかの、未公開資料の自筆「読書ノート」を参照することにより、作家が

---

2) 例外的な論述としてたとえば次がある。Jacqueline Chénieux-Gendron, « René Crevel ou l'angoisse des "minutes au ralenti" », *Le Surréalisme et le roman 1922-1950*, L'Âge d'Homme, Lausanne, 1983, p. 223-241. Masao Suzuki, « Victoire d'Oreste. Domaine théorique de René Crevel », *Pleine Marge*, n° 15, juin 1992, p. 61-71.

何を読み、どのようにそれを採り込んだのか、その実態を解明しようと努めてきた。「読書ノート」はすなわち、彼の読書の総体を意味しない。しかし後述するように、アタッシュケースの「読書ノート」の多くは、彼自身の手によって几帳面な冊子体となり、対象は体系立っていて、書き写しの狭間に、彼自身の言葉が熱を帯びて差し挟まれている。それ自体が重要な資料であることは疑えず、その重要性は彼の作品との関わりにおいていや増すだろう。アタッシュケースに収まった「読書ノート」はだから、今なお潜在的である。

原典に照らして作家の理解度の高低を暴露したり、誤読を断罪したり、あるいは逆に、慧眼や予言を顕揚し復権することが問題なのではない。クルヴェルの手によるその捻じ曲がり、屈折や歪曲の具合が、きっとクルヴェル的なものを、延いてはシュルレアリスム的なものを、事後的に定義してくれるだろう。筆者の研究はいつも、そんな期待のもとにある。

## II. 馴れ初めと成り行き

アタッシュケースとの馴れ初めと研究の成り行きをここで記述することは、本稿の目的や正当性を述べるためにあながち無駄とは思われない。

クルヴェルはソルボンヌ大学の法学部に進学し、「小説家としてのディドロ」<sup>3)</sup>について博士論文の執筆を目指していた。少なくとも彼自身による自伝的記述にはそのようである。1930年代には、件の『ディドロのクラヴサン』という書物があるから、ディドロに対する関心は一過性のものとは思われない。残念ながら『ディドロのクラヴサン』は小説家ディドロ

---

3) René Crevel, « Autobiographie de René Crevel » [1925], *Œuvres complètes*, tome 1, édition établie, présentée et annotée par Maxime Morel, Éditions du Sandre, 2014, p. 25. 本稿におけるクルヴェル全集（全2巻同年発行）からの引用は、次の略号と該当頁をもって記す。OC1（第1巻）。OC2（第2巻）。

を論じる研究書ではなく、博論のプロトタイプとして読むことは難しい。クルヴェルは言葉の普通の意味では「小説家」なのだから、クルヴェル研究をするのなら、この未提出の博論を調査するのが先決だろう。

いまだまとまったかたちでその所在を筆者は知らないでいるが（あるいはすでに目に触れているのにそれと気付けずにいるのか）、かつてこうした疑問からドゥーセ文庫の司書に助言を求めたことがある。この文庫は、服飾デザイナーのジャック・ドゥーセの収集によるもので、ブルトンも一時期そのコレクションの充実に蔵書係として関わった。近現代フランス文学の草稿や書簡など、文学研究におけるいわゆる一次資料を大量に所蔵していることで知られている<sup>4)</sup>。筆者の疑問に文庫の彼らは、クルヴェルの原稿が詰まったアタッシュケースの存在を教えてくれた（そこに博論が入っているという意味ではなかった）。いつかまとめて調査してみたいと思った。

幸運にも筆者は、2003-2005年度に、「未公開資料によるルネ・クルヴェル作品の精神分析的・革命論的・科学哲学的背景の研究」において、このアタッシュケースを調査する機会に恵まれた<sup>5)</sup>。アタッシュケースのなかには、あの「デイドロ」と銘打たれたバインダーがあるではないか。いきなりこれかと思ったがぬか喜びで、残念ながら探していた博論の下書きとはみなせなかった。一方、「読書ノート」に惹かれた。「マラー」、「フォイエールバッハ」、「精神分析」、「20世紀諸科学」などとタイトルがある……。

クルヴェルの「読書ノート」は、時に性急な悪筆で、お手製の略号も少

---

4) ドゥーセ文庫については次のコラムを参照。吉井亮雄「ジャック・ドゥーセ文庫」（田口紀子・吉川一義編『文学作品が生まれるとき：生成のフランス文学』京都大学学術出版会、2010年、471-474頁）。

5) 2003-2005年度科学研究費（特別研究員奨励費）の助成による（課題番号03J08812）。

なくなく、「文字は地震計の波形」という彼の言葉を思い出す<sup>6)</sup>。日記のような日付は皆無で、ある書物からの書き写しだろう、そう察しはついて、それが明記されていない。書き写し箇所の心乱れた強調線や、アタッシュケースの表面と同じイラストが顔を出す。どこからどこまでが引用で、どこがクルヴェルの私見なのか。五里霧中のまままづはまるまる「読書ノート」を鉛筆で転写し始めた。

ドゥーセ文庫は資料保全の観点からか午後の数時間しか閲覧できない。合間の時間はできたての穴だらけの転写ノートを携えて、フランス国立図書館と梯子した。当時作家が手に取ることできた版をあたる。出典を探す。なんとか版が割れるとクルヴェルの文字の解説を助ける。そんな作業を繰り返し、それと並行して、クルヴェルの刊行物や書簡なども紐解いた。ノートがいつ頃つけられたのか、どんな思索の支えとして機能しているのか。こうしてなんとか「読書ノート」のすべてと、それに類する資料を併せて転写し終え、註をつけるところまで漕ぎ着けた。そうしてこれを、『デイドロのクラヴサン』を中心とする「理論書」の類いと照合した<sup>7)</sup>。

---

6) Crevel, *Les Pieds dans le plat* (1933), OC2, p. 624.

7) Daigo Suzuki, *Formes et pensée du marxisme chez le surréaliste René Crevel*, tome II, thèse de doctorat, Univ. Paris VII, 2006 (資料編：「読書ノート (B'-III-12, Ms. 6929 à 6942, René Crevel, Notes de lectures)」他の転写・注釈・解題)。本稿におけるこの資料編からの引用は、略号 II と該当頁によって記す。この資料編に基づく論述として、たとえば次を参照。拙論「シュルレアリスムと科学哲学 (2) —ルネ・クルヴェル「愛と詩と科学と革命の交差点に」読解」、東京都立大学仏文研究室『佛文論叢』第 16 号、2004 年、35-61 頁 (「20 世紀諸科学」ノート (Ms. 6942 1/10-10/10) 等に基づく)。拙論「ルネ・クルヴェルの革命論—「バルセロナ講演要旨」読解」、塚本昌則・鈴木雅雄編『〈前衛〉とは何か? 〈後衛〉とは何か?: 文学史の虚構と近代性の時間』平凡社、2010 年、465-486 頁 (「フォイエールパッハ」ノート (Ms. 6935 1/18-18/18) 等に基づく)。拙著『ルネ・クルヴェル: ちりぢりの生』水声社、2011 年、「第四章: 精神分析—オレステス神話の変更」、121-168 頁 (「精神分析」ノー

筆者は現在、2021-2022年度において「未公開資料に基づくルネ・クルヴェル作品のハヴロック・エリスとサドの影響の研究」を遂行している<sup>8)</sup>。本研究は、上述の研究の続編に位置づけられ、「読書ノート」のうち、「サド」と「ハヴロック・エリス」のノートについて特に採り上げるものだ。前回は「理論書」、今回は「小説」。「理論書」と「小説」などといかにも便宜的だが、いつか果たしてひとつの像を結べるだろうか。1929年出版の小説『おまえたちは狂人か』とエリス、1933年の小説『皿に突っ込んだ足』とサドの関係を解明するつもりだ（サドやエリスについては稿を改める）。

遠回りに過ぎたかもしれない。本稿の主たる目的は、クルヴェルのアタッシュケースのなかの「読書ノート」と、その対象となった書物等を、容易に対照可能なかたちでリストアップすることにある。本稿の内容の多くが、実は筆者が2006年にフランスの大学に提出した拙論の一部をなしている（II, « Notice préliminaire », p. V-XVIII）。また、筆者はこれまでに「読書ノート」について部分的に報告したこともあった<sup>9)</sup>。しかし今般の「エリス・サド研究」の開始により、かつて制作したコーパスの見直しと増補の機会を得た。すでに整理された「読書ノート」の一部を精査することから始めたのである。こうした経緯から、加筆・訂正した最新版の「読書リスト」が出来上がった。日本語の紀要という手に取りやすい媒体に、アタッシュケースの概要と併せてこれをコンパクトに載せ、筆者の今後の

---

ト（Ms. 6941 1/13-13/13）等に基づく）。クルヴェル『おまえたちは狂人か』（拙訳）、風濤社、2016年、巻末論考「小説家クルヴェル、シュルレアリスト」、182-246頁（「ディドロ」ノート〔整理番号なし〕等に基づく）。各「ノート」については、後掲第IV章[B]参照。

8) 2021-2022年度科学研究費（研究活動スタート支援）の助成による（課題番号21K20021）。

9) 前掲拙著『ルネ・クルヴェル』『書誌C：未公開資料』、282頁。

作業の拠点となる参照物をひとつ、作っておきたかったこともある。

本稿の実用性はしかし、2014年に刊行されたクルヴェル全集との関係において特に認められるだろう。クルヴェル作品はそれまで、主にポヴェール社から不定期に個別に再版されてきた。だから入手困難だったテキストも含めて初めて全集として編まれた意味は大きい。それぞれ800頁を超える大部の2巻本である。人名索引が別冊で用意されるなど、利便性も高い。註や解説が残念ながら最小限にとどめられていたり、たとえば小説作品に編者による独自の区切りが設けられるなど勇み足も見受けられるが<sup>10)</sup>、自伝的記述、文芸・美術批評、詩・散文小作品、シュルレアリスム関係文章、小説、政治的文章という括りにも、一定の説得力があるだろう。クルヴェル研究だけでなくシュルレアリスム研究にとってもまた必携の書である。

この全集の巻末資料に、問題の「読書ノート」の簡易的記述がある。編者のモレルは次のように資料を紹介している。「ジャック・ドゥーセ文庫が所蔵する資料に、ルネ・クルヴェルによる読書ノート（整理番号 B'-III-12- Ms. 6928-6942）が相当数含まれるものがある。これらのノートの大半が簡潔な要約や入念な読書による引用からなっていることや、出版はもともと意図されておらず、ましてや人の目に触れることも想定されていなかったことに鑑みて、それらを完全なかたちで〔この全集に〕再録するのは適当でないと思われた。しかしながらひとりの作家の読書の一端を垣間見るのは興味深いにちがいないから、こうした観点から、資料名を掲載し、それぞれの内容を手短かに記述することにした」<sup>11)</sup>。

こうしてモレルは、たとえば「20世紀諸科学」ノートについて、次のような数行の紹介を施している。

---

10) OC2, p. 390.

11) *Ibid.*, p. 817.

« Sciences au XXe » [Ms. 6942, 10 feuillets]

本資料を構成するノートは以下の著作からのものである。Rudolf Carnap, *L'Ancienne et la nouvelle logique*, Paris, Hermann et C<sup>ie</sup>, 1933. Gaston Bachelard, *Le Nouvel esprit scientifique*, Paris, Félix Alcan, 1934. Hans Reichenbach, *La Philosophie scientifique*, Paris, Hermann et C<sup>ie</sup>, 1932. Alfred North Whitehead, *La Science et le monde moderne*, Paris, Payot, 1930<sup>12)</sup>.

この「20世紀諸科学」ノートは、他のノートと比較して例外的で、出典を特定しやすい。クルヴェル自身が著者と著作を明記している稀なケースだからだ。彼が「科学」の名でまとめたのは、バシユラルをはじめとする認識論で、ウィーン学派やホワイトヘッドも対象となっている。たしかにシュリックの著作の特定は、資料の決定的な箇所が破損しているせいで、難しいにちがいない（つまり、内容から書名を割り出すほかない）。しかし、カルナップについては、併せて2冊の本が読書対象になっていて、このことはクルヴェルが明らかにしている（II, 164）。つまり、上述のモレルのリストには、次の2冊も加えなければならない。

・ Carnap, Rudolf, *La Science et la métaphysique devant l'analyse logique du langage*, traduction du Général Ernest Vuillemin, revue et mise à jour par l'auteur, introduction de M. Marcel Boll, Hermann & C<sup>ie</sup>, coll. « Actualités scientifiques et industrielles », n° 172, 1934. 【リスト5】

・ Schlick, Moritz, *Les Énoncés scientifiques et la réalité du monde extérieur*, traduction du Général Ernest Vuillemin, revue et mise à jour par l'auteur, introduction de M. Marcel Boll, Hermann & C<sup>ie</sup>, coll. « Actualités scienti-

---

12) *Ibid.*, p. 821.

fiques et industrielles », n° 152, 1934. 【リスト 36】

またモレルは、たとえば「ハヴロック・エリス」ノートについて、次の一文から始めている。

« Henry Havelock Ellis » [Ms. 6939, 6 feuillets]

ルネ・クルヴェルによる出典指示はない。この読書は、ハヴロック・エリスが当時のフランスでほとんど知られていなかっただけに興味深い。ブルトンは [……]<sup>13)</sup>

たしかに判別に手間取るかもしれないが、クルヴェルはやはりノートに出典を部分的に示している (II, 123)。つまり、次の書物を指摘しなければならない。

・ Ellis, Havelock, *Études de psychologie sexuelle I : La Pudeur, la périodicité sexuelle, l'auto-érotisme*, édition française, revue et augmentée par l'auteur, traduite par A. Van Gennep, Mercure de France, 1908. 【リスト 9】

モレルの記述は、意図して簡潔なものであるが、読書対象の書名や版については、見落としが多い。本稿は、モレルの仕事の粗探しが目的なので毛頭ない。労作にちがいないこの全集の白ページに、本稿の抜き刷りが差し挟まれる「実用」を、ただ夢みている。

日本語の紀要として手に取りやすく、全集版の補足として利用でき、筆者により最近の手直しを経た読書リストを、アタッシュケースのあらまし、ノートのあらましと併せて、ここに掲載する。どのノートにおいて、どの本が読まれているか。あるいは逆に、どの本が、どのノートに書き写

---

13) *Ibid.*

されているか。把握が容易となるように、本稿末の読書リストの通し番号(1～38)と、その参照を促す記号【 】を付した(たとえば上述のシュリックに付したように【リスト36】)。

### III. アタッシュケース

アタッシュケースの大きさは三方28×9×39cm。ケース全体の分類記号は「B'-III-12」。総数約560枚ほどの原稿などで埋め尽くされたケースの中身は、下位区分の整理番号が付されているものと(Ms. 6921～Ms. 6946)、そうでないもの([sans cote intérieure])がある。アタッシュケースの内訳は、クルヴェル自身の運勢を占ったホロスコープやダリからの私信、切り抜き記事や分類不能と思しき紙片などを除くと、おおよそ次の[A][B]の2種類に大別できるだろう。

[A]: 小説や論考の草稿の類い(Ms. 6921～Ms. 6927, Ms. 6943～Ms. 6946)。

[B]: 「読書ノート」「研究ノート」「雑ノート」などのノートの類い(Ms. 6928～Ms. 6942他)。

[A]には次がある(「ff」は枚数、「dactyl.」はタイプ原稿、「mss.」は手書き原稿を指す)。

・ B'-III-12 René Crevel Ms. 6921 Dalí ou l'anti-obscurantisme (ダリ論)<sup>14)</sup>  
20 ff. [dactyl.]

・ B'-III-12 Ms. 6922 (René Crevel) Roman cassé (遺稿小説)<sup>15)</sup> 11ff États divers [mss.]

・ B'-III-12 Ms. 6923, Ms. 6924, René Crevel Individu et société<sup>16)</sup>, 7 ff.

14) Crevel, *Dalí ou l'anti-obscurantisme* (1931), OC1, p. 429-440.

15) Crevel, *Le Roman cassé* (1935), OC2, p. 653-671.

mss., 34 ff. dactyl.

・ B'-III-12 Ms. 6925, Ms. 6926, René Crevel, Note en marge du jeu de la vérité (シュルレアリスム論<sup>17)</sup>, 7 ff. mss. 10 ff. dactyl.

・ B'-III-12, Ms. 6927, René Crevel, Êtes-vous fous ? (小説<sup>18)</sup>, 3 états dactyl. 31 ff.

・ B'-III-12, Ms. 6943, Ms. 6944, René Crevel, Hémorragie d'or ou bras cassé (政治時評<sup>19)</sup>, 2 états incomplets [mss.]

・ Ms. 6945. [36 ff. mss., 7 dactyl.]

・ B'-III-12, Ms. 6945 [bis] , Ms. 6946, René Crevel, Photographie<sup>20)</sup>, 2 états [7 ff. mss.]

・ Photographie, 2 manuscrits différents, 6946 [bis]. [31 ff. mss.]

これらの資料がどの小説や論考の草稿の類いに該当するかについては、上記それぞれの脚註 14) ~ 20) を参照してほしい。

#### IV. 読書ノート

[B] については、整理番号がないものも含めると、以下がある（便宜上、[1] ~ [5] とする）。

[1] : B'-III-12, Ms. 6928, René Crevel Révolution française (フランス革命), Notes d'études (研究ノート), 47 ff. mss.

---

16) 本稿脚註 30 参照。

17) Crevel, « Note en marge du jeu de la vérité » (1934), OC1, p. 847-851.

18) Crevel, *Êtes-vous fous ?* (1929), OC2, p. 377-470.

19) Crevel, « Hémorragie d'or ou bras cassé » (1935), *Ibid.*, p. 713-714.

20) ここで実際に問題となるのは「写真」の「純粋な受動性」を否定する次の論考である。Crevel, « L'art dans l'ombre de la maison brune » (1935), OC1, p. 457-463.

[2] : B'-III-12, Ms. 6929 à 6942, René Crevel, Notes de lectures (読書ノート)

[3] : B'-III-12, Ms. René Crevel, Diderot (ディドロ), [Notes diverses (雑ノート)] [sans cote intérieure (整理番号なし)]

[4] : B'-III-12, René Crevel, Notes diverses (雑ノート) [sans cote intérieure (整理番号なし)]

[5] : René Crevel, Notes diverses (雑ノート) [sans cote intérieure (整理番号なし)]

モレルによる全集は上記 [1] [2] を「Notes de lectures (読書ノート)」とみなしている。[1] に「Notes d'études (研究ノート)」とあるが、これは「フランス革命」に特化した集中的な読書だから、モレルが [1] と [2] を一括して「読書ノート」と称することに大きな異論はないだろう。

上記資料 [3] 以降については、モレルの言及はない。これらは「整理番号なし」の束で、図書館によって単に「ディドロ」や「Notes diverses (雑ノート)」とのみ銘打たれているものだ。たしかにそれ以上の分類に苦しむ混在ぶりだが、われわれの調査の結果、「読書ノート」に近い資料が数点、これらのなかにもみつかった。

以下、[1] から順に、それぞれの概要を示す。筆者の「研究」の主眼はこれまで、[2] の「読書ノート」にあり続けてきた。「読書ノート」の各々に照らした創作背景の詳細については、筆者のこれまでとこれからの各論に譲るほかない。

[1] : B'-III-12, Ms. 6928, René Crevel, Révolution française (フランス革命), Notes d'études (研究ノート), 47 ff. mss.

47 枚の手書き原稿 (約 20 × 13cm)。濃い青インク・黒インク。大革命についての時系列に沿った歴史的研究。アルベール・マチエの一連の歴

史書から詳細な転記がなされている。他と比較しても文字が細かく緻密な印象を抱かせるノートで、記述の没頭からだろうか、次の [2] の「読書ノート」においてしばしば見受けられるクルヴェル自身の言葉がほとんどない。「研究ノート」と呼ぶのがふさわしいかもしれない。

クルヴェルは「革命」の到来を真剣に考えていた最晩年に、ジッドにこう書き送っている。「革命に関するマティエの本を読みながら、あなたがミュチュアリテ会館で話していた 1789 年以降の文学について考えました」<sup>21)</sup>。ジッドによる演説「文学と革命」が、「革命的作家芸術家協会 (A. E. A. R.)」の主催でミュチュアリテ会館で行われたのは、1934 年 10 月 23 日のことらしいから、自殺まで一年にも満たない晩年も晩年に、クルヴェルはマチエをまとめて読んでいたことになる<sup>22)</sup>。【リスト 21 ~ 25】

[2] : B'-III-12, Ms. 6929 à Ms. 6942, René Crevel, Notes de lectures (読書ノート)

111 枚の手書き原稿 (約 20 × 13cm)。濃淡青インク・黒インクあるいは鉛筆。クルヴェル自身による表紙もしくはそれに代わる見出しがつけられているものが大半である (つまり「ヘラクレイトス」「マラー」「サド」「無神論」「フォイエルバッハ」「マルクスとエンゲルス」「レーニン」「スターリン」「ハヴロック・エリス」「レヴィ＝ブリュル」「精神分析」「20 世紀諸科学」)。以下が整理番号。

- ・ « Héraclite » (Ms. 6929 1/3-3/3) 【リスト 2, 3】
- ・ « [Pythagore] » (Ms. 6930) 【リスト 3】

---

21) André Gide, René Crevel, *Correspondance (1927-1934)*, édition établie, présentée et annotée par Frédéric Canovas, Centre d'Études Gidiennes, Université de Nantes, Lyon, 2000, p. 56.

22) 上記ジッド = クルヴェル書簡編者による註参照 (*Ibid.*, p. 54 et 58)。

Le simple se toujours le simplifié

Choses et mouvements  
si le mouvement déforme les choses,  
les choses ne se déforment ~~pas~~  
seulement le mouvement.

Pour retracer l'histoire du déterminisme il faudrait reprendre  
de l'histoire de l'astronomie. Sur le monde régulier des astres se  
règle notre destin. Si l'approche est fatale à notre vie, c'est l'état primordial  
Déterminisme de Dieu sur la Terre.

Le ciel détermine la Terre (Saisir est haut jour)  
Le ciel n'est pas Dieu, habitation de Dieu. L'Être créé par  
Dieu qui s'abrite. La Terre = Maison. Dieu habite sur Terre.

Astronomie Newtonienne donne sa rigueur à la doctrine des  
catégories Kantienne, on aboutit aux formes a priori d'espace et de temps.  
Double sens de déterminisme

- 1° caractère fondamental du phénomène
  - 2° forme a priori de la connaissance objective
- Sur le plan de l'astronomie, pensée relative aux perturbations du mouvement  
La précision de la mesure astronomique aurait permis la découverte des lois.  
Si le monde parait réglé, il fallait que les lois découvertes en leur forme  
nécessairement simple.
- On voulait que les corps célestes fussent géométriquement simples. Mais quel  
sens la mesure géodésique, on cherchait la forme aplatie du globe. On  
de mesurait l'aplatissement de la Terre.
- Le fait est de déterminer le mouvement de l'ordre fondamental, repère spatial donne  
l'existence à l'ordre de déformation des corps célestes, à l'ordre de la perturbation  
des trajectoires.
- l'observation ne peut faire nous approcher le déterminisme, car  
le déterminisme ne lie pas les aspects du phénomène avec la  
même rigueur.

図版2 ジャック・ドゥーゼ文庫所蔵 クルヴェル「読書ノート」[20世紀諸  
科学] (Ms. 6942 5/10) より (II, 166) 【リスト1】

(2) Il peut être l'image ou au moins le symbole de  
l'ench. de réel.  
Diderot dit de Berkeley. on appelle idéalités ces  
φ. qui n'ayant conc.  
que de leur existence et de sensation qui se ou c'est  
au regard d'eux mêmes, n'admettent plus autre chose.  
Système extrême est celui qui ne pourrait, ce me semble,  
dérider sa naissance qu'à des avantages, supérieurs qui  
si la honte de l'esprit humain et de la φ. et la  
+ difficile à combattre, puisque le + absurde de t.

Conversation avec d'Alembert.

Diderot dit de nous, de instruments doués de  
sensibilité et de mémoire (clavier).  
à comparer avec le jeune un objet psychologique  
pour moi-même et un objet physiologique par autre  
D'Engels.

de Berkeley Diderot dit: Il y a une harmonie  
de délie ou le clavier sensible à l'âme qui il était  
le seul clavier qu'il y eût au monde et que  
la harmonie de l'univers se passait en lui.

même erreur s'il voit que tout  
la désharmonie du monde passe  
en lui.

図版3 ジャック・ドゥーゼ文庫所蔵 クルヴェル「読書ノート」「デイドロ」  
(整理番号なし)より (II, 193) 【リスト15】

- ・ « [Philosophie au Moyen-âge] » (Ms. 6931 1/2-2/2) 【リスト 12】
- ・ « Marat » (Ms. 6932 1/7-7/7) 【リスト 18, 19】
- ・ « Sade » (Ms. 6933 1/10-10/10) 【リスト 31-34】
- ・ « Athéisme (voir Sade), Mythes, Mythes sociaux, Religion » (Ms. 6934 1/9-9/9) 【リスト 22, 35】
- ・ « Feuerbach » (Ms. 6935 1/18-18/18) 【リスト 7, 10, 15, 16】
- ・ « Marx et Engels » (Ms. 6936 1/7-7/7) 【リスト 14, 15, 20】
- ・ « Lénine » (Ms. 6937 1/12-12/12) 【リスト 14, 15, 29】
- ・ « Staline » (Ms. 6938 1/9-9/9) 【リスト 37】
- ・ « Havelock Ellys [sic] » (Ms. 6939 1/6-6/6) 【リスト 9】
- ・ « Lévy-Bruhl » (Ms. 6940 1/4-4/4) 【リスト 17】
- ・ « Psychanalyse » (Ms. 6941 1/13-13/13) 【リスト 11, 26, 27】
- ・ « Sciences au XXe » (Ms. 6942 1/10-10/10) 【リスト 1, 4, 5, 28, 36, 38】

これらの「読書ノート」はおおよそ、参照した書物からの原則として正確な書き写しと、それについての彼自身の言葉から構成されている。モレルのいうように「要約」の場合もあるが、読書に刺激された二次的な思考の痕跡もある。いずれにせよ引用の分量に比べて、彼自身の言葉の量は、相対的に少ない。ノートにはしかし、クルヴェルの手により下線強調されている部分が多い。なぜその本なのか、なぜその引用なのか、なぜその下線なのか。クルヴェル自身の言葉は稀だが、案外ノートは、言外に饒舌だろう。

クルヴェルのノートには、日付はもちろん、ほとんどの場合、参照したテキストのタイトルも、書き写したページの表記もない。学者がいずれ論文を書くためにするような、収集資料の出典をメモしておこうなどという配慮は微塵も感じられない。モレルのいうように、クルヴェルは「作家」

にちがいない。

クルヴェルの「読書ノート」は、参照した本のページに沿って素直に書き並べる場合もあれば、いわばテーマに沿って再構成される場合もある。そうした系統立てをノートのタイトルとして採用したようにみえる。たとえば、レーニンがその著『唯物論と経験批判論』において言及するフォイエエルバッハは、クルヴェルによって「レーニン」ノートではなく、「フォイエエルバッハ」ノートに収められている。

「ヘラクレイトス」や「中世哲学」を経て、「フォイエエルバッハ」や「レーニン」、そして「精神分析」や「20世紀諸科学」まで、読書は通史的で多岐に富んでいる。しかし、「フォイエエルバッハ」「マルクスとエンゲルス」「レーニン」などの見出しからもわかるように、弁証法的唯物論が関心の中心だ。クルヴェルが唯物論に切実な興味を持ち始めたのは1930年に入ってからだから<sup>23)</sup>、モレルのいうようにこうしたノートの大半が、概ね「1930年代」のものであるにちがいない<sup>24)</sup>。

クルヴェルが「サド」や「マラー」の「無神論」に惹かれ、他方で「レヴィ＝ブリュル」の「未開」の思考様式に思いを馳せる時、やはりここでも唯物論の立場から、「宗教」や「神話」を再考しようとしているようにみえる。

フロイトの「精神分析」や「ハヴロック・エリス」の心理学などに関しても、「夢のなかにおいてさえ認められる精神の弁証法的歩み」(II, 143)が指摘される一方で、「フロイトにおける弁証法的精神の欠如」(II, 148)が批判されてもいるから、同様だろう。

---

23) それはまた当時のシュルレアリスム・グループの読書傾向でもあった。次を参照。André Breton, *Œuvres complètes*, t.II, Gallimard, Pléiade, 1992, « Notice » pour *Les Vases communicants* (1932), p. 1354.

24) OC2, p. 817.

「20世紀諸科学」ノートも、事情はかわらない。バシュラールの現象技術論やホワイトヘッドの道具論への注目は、時空概念の相対化を経た20世紀の科学論を使用してなお、「物」についてどのように語ることができるのか、困難な思考を続けているようにみえる。

このように「読書ノート」は弁証法的唯物論によって方向づけられていて、1930年代に彼が公にした仕事と同調するかのようだ。彼の読み方は、教条的で権威主義的なマルクス主義の通俗性に通じる一方で、啞然とするほど突拍子もない力技が出る時もある。愚直な学びが飛躍する。たとえば「レーニン」ノートには、原因と結果の「普遍的相互性」についての書き写しがあるが、その時クルヴェルは唐突に、「愛」と「往復運動」について書きつけている（II, 98）。すぐれてシュルレアリスム的な、わかりやすいエロティシズムだろうか。

[3] : B'-III-12, Ms. René Crevel, Diderot (ディドロ), [Notes diverses (雑ノート)] [sans cote intérieure (整理番号なし)]

41枚の手書き原稿。サイズ不揃い。青紫黒インク・鉛筆。ルソー『告白』（第4巻）「切り抜き」8枚。これらの雑多な「ディドロ」ノートは、主に次の3冊の本を対象としている。

- ・ルソー『告白』（約20枚。青インクと鉛筆。約20×31cm等）【リスト30】。
- ・ディドロ『運命論者ジャックとその主人』（数枚。青紫インクと鉛筆。サイズ不揃い）【リスト8】。
- ・ゴンクール兄弟『18世紀美術』（4枚。黒インク。約16×21cm等）【リスト13】。

このノートが図書館によって「ディドロ」というバインダーに分類されているのは、ディドロはもちろんのこと、ルソーやゴンクール兄弟から

も、ディドロについての文章を引いているからである。クルヴェルはたとえば、ゴンクール兄弟『18世紀美術』からは、次の文章に下線を引いている。「ディドロは彼 [=シャルダン] を当代切っつての画家だと主張している」<sup>25)</sup>。またルソーの『告白』については、特に第5巻及び第7～10巻を対象とした手広い書き写しがあるが、なかでもエピネー夫人のジュネーヴ旅行をめぐるディドロの短信（第9巻）などに注目している<sup>26)</sup>。

しかしこれらのノートのほとんどが、ディドロをはじめ、エピネー夫人、ラモー、グリム、ドルバック、プレヴォー、ダランベールなど、『告白』に登場する歴史上の人物の肖像をただ純粋に書き写しただけにみえる。これは小説家ディドロについての博論執筆の下準備だったのだろうか。そうした視点からこの資料を再調査すべきかもしれないが、あまりに核を欠いている。最晩年のクルヴェルは、たとえば「革命的作家芸術家協会」の機関誌『コミュニヌ (Commune)』などにおいて頻繁に、造形美術について言及しているから、このノートが示しているのは「小説家としてのディドロ」ではなく、「美術批評の父ディドロ」<sup>27)</sup>なのかもしれない。

他方、この「雑ノート」のなかには、「読書ノート」と性質を同じくするノートが数枚だけ存在する。クローチェ経由のヘーゲルに関するノート【リスト7】、レーニン経由のバークレーに関するノート【リスト15】及び、シュルレアリスム出版から上梓された自著『ディドロのクラヴサン』（1932年）を対象にしたノートである【リスト6】。クルヴェル作品における自他を問わない引用スタイルを思い出す時、自作を対象にしたノートがあること自体、意味をなす。『ディドロのクラヴサン』以降の彼が、

---

25) Edmond et Jules de Goncourt, *L'Art du dix-huitième siècle*, II, Flammarion : Fasquelle, [1928], p. 115-116.

26) Jean-Jacques Rousseau, *Les Confessions de J.-J. Rousseau*, vol. 2, Flammarion, [1907], p. 144.

27) Crevel, « Aveux du peintre, aveux de l'homme » (1935), OC1 p. 472.

『デイドロのクラヴサン』をどのように読んだのか。残念ながらこの資料は、こうした問いに即座に答えてくれない。単語が星座のように位置する走り書きで、よほどの圧力をかけないとまとまった何かをそこから引き出すのは難しいだろう。

[4] : B'-III-12, René Crevel, Notes diverses (雑ノート) [sans cote intérieure (整理番号なし)]

9枚の手書き原稿。サイズ不揃い。青紫黒インク・鉛筆。これらのノートは雑然としているが、そのなかに1枚だけ、上記[2]に近しい「読書ノート」が含まれている。フロイトの著作を対象としている【リスト11】。

[5] : René Crevel, Notes diverses (雑ノート) [sans cote intérieure (整理番号なし)]

32枚の手書き原稿。サイズ不揃い。青黒インク・鉛筆。自身の記事の「切り抜き」1枚<sup>28)</sup>。クルヴェルの肉筆ではない紙片1枚(不明)。

これらの「雑ノート」には、クルヴェルの時事的な文章の部分的な下書きや<sup>29)</sup>、「Notes pour « Individu et société » in Commune (『コミューヌ』誌掲載「個人と社会」のためのノート)」(5枚。約17×22 cm。青インク)と分類されたものが含まれている。「個人と社会」とは、ジッドらとともにクルヴェルも呼びかけた「文化擁護のための国際作家大会」(1935年6月)において、発表が予定されていたテキストとされる<sup>30)</sup>。そのた

---

28) この「切り抜き」は以下からのものである。Crevel, « Tandis que la pointolle se vulcanise la baudruche » (1934), *Ibid.*, p. 838-846.

29) この下書きは以下のものである。Crevel, « La situation culturelle dans l'Allemagne nazie » (1934), OC2, p. 689-698. Crevel, « De la guerre préventive aux aveugles pour rire » (1935), *Ibid.*, p. 710-712.

めのノートは、「サド」「フォイエエルバッハ」「レヴィ＝ブリュル」「20世紀諸科学」など、「読書ノート」のあちらこちらに送り返すことが可能な引用を多く含む。しかしこれらの引用や横に添えられたクルヴェルの言葉はあまりに断片的だから、これを「読書ノート」を包摂する総括的なノートと断ずるのは早計だろう。

## V. 読書リスト

最後に、本稿第IV章 [B] において読書対象となったテキストを、アルファベット順にリストアップする。[B] の本文中に挿入した記号【   】内の番号は、以下の通番と対応している。特にモレルが全集で採り上げた「読書ノート」([B] の [1]・[2]) と、以下のリストを照合してほしい。なお、出版地がパリの場合、割愛した（記号 [   ] は推定を指す）。

1. Bachelard, Gaston, *Le Nouvel esprit scientifique*, Félix Alcan, 1934.
2. Bise, Pierre, *La Politique d'Héraclite d'Ephèse*, Félix Alcan, 1924.
3. Burnet, John, M.A. et LL.D., *L'Aurore de la philosophie grecque*, édition française par Aug. Reymond., Payot, 1919.
4. Carnap, Rudolf, *L'Ancienne et la nouvelle logique*, traduction du Général

---

30) Crevel, « Individu et société » (1935), *Ibid.*, p. 723-729. このテキストは、クルヴェルの大会直前の死によって、声に出されることはなかった。これにはいくつかのヴァージョンがあり、特にシュルレアリスムからの離脱をめぐる文中の発言に関しては、本人の「真意」を慎重に見極める必要があるだろう (Cf. Wolfgang Klein, « Le dernier discours de René Crevel : le politique et la politique », *Mesures et démesure dans les lettres françaises au XX<sup>e</sup> siècle*, études recueillies par Jean-Pierre Goldenstein et Michel Bernard, Honoré Champion, 2007, p. 247-258. 前掲拙著『ルネ・クルヴェル』「第五章：政治的位置—個人と社会」、221頁)。また、「国際大会」の報告書としては、次の労作がある（クルヴェルの「演説」も収録）。A. ジッド・A. マルロー・L. アラゴン他『文化の擁護—一九三五年パリ国際作家大会』（相磯佳正・五十嵐敏夫・石黒英男・高橋治男編訳）、法政大学出版局、1997年。

- Ernest Vuillemin, revue et mise à jour par l'auteur, introduction de M. Marcel Boll, Hermann & C<sup>ie</sup>, coll. « Actualités scientifiques et industrielles », n° 76, 1933.
5. ——— *La Science et la métaphysique devant l'analyse logique du langage*, traduction du Général Ernest Vuillemin, revue et mise à jour par l'auteur, introduction de M. Marcel Boll, Hermann & C<sup>ie</sup>, coll. « Actualités scientifiques et industrielles », n° 172, 1934.
  6. Crevel, René, *Le Clavecin de Diderot*, Éditions surréalistes, 1932.
  7. Croce, Benedetto, *Ce qui est vivant et ce qui est mort de la philosophie de Hegel*, traduit par Henri Buriot, V. Giard & E. Brière, 1910.
  8. Diderot, Denis, *Jacques le fataliste et son maître*, *Cœuvres complètes de Diderot* (Belles-lettres, III, Romans, contes, critique littéraire), éd. J. Assézat, tome sixième, Garnier frères, 1875.
  9. Ellis, Havelock, *Études de psychologie sexuelle I : La Pudeur, la périodicité sexuelle, l'auto-érotisme*, édition française, revue et augmentée par l'auteur, traduite par A. Van Gennep, Mercure de France, 1908.
  10. Feuerbach, L., *La Religion : mort – immortalité – religion*, traduction de l'allemand avec l'autorisation de l'auteur par Joseph Roy, A. Lacroix, 1864.
  11. Freud, Sigmund, *Essais de psychanalyse appliquée*, traduit de l'allemand par E. Marty et M. Bonaparte, Gallimard, 1933.
  12. Gilson, Etienne, *La Philosophie au Moyen Age de Scot Erigène à G. d'Occam*, [nouv. éd.], Payot, coll. « Payot » : 25 ; 26, 1930.
  13. [Goncourt, Edmond et Jules de, *L'Art du dix-huitième siècle*, II, Flammarion : Fasquelle, [1928].]
  14. Lénine, *L'État et la Révolution*, nouvelle édition refondue, Librairie de

- l'Humanité*, coll.« Bibliothèque communiste », 1925.
15. ——— *Cœuvres complètes, T.13, Matérialisme et empiriocriticisme : Notes critiques sur une philosophie réactionnaire*, première traduction française rédigée par Victor-Serge d'après la deuxième édition russe (1920), Éditions sociales internationales, 1928.
  16. Lévy, Albert, *La Philosophie de Feuerbach et son influence sur la littérature allemande*, Félix Alcan, « Bibliothèque de philosophie contemporaine », 1904.
  17. Lévy-Bruhl, Lucien, *Le Surnaturel et la nature dans la mentalité primitive*, Félix Alcan, 1931.
  18. Marat, *La Correspondance de Marat*, recueillie et annotée par Charles Vellay, Fasquelle, 1908.
  19. ——— *Les Pamphlets de Marat*, avec une introduction et des notes par Charles Vellay, Fasquelle, 1911.
  20. Marx, K. et Engels, F., *Correspondance : t.I : les premières années de leur liaison : 1844-1849*, Œuvres complètes de Karl Marx, traduction de J. Molitor, Alfred Costes, 1931.
  21. [Mathiez, Albert, *La Révolution et l'église*, Armand Colin, 1910.]
  22. ——— *Rome et le clergé français sous la Constituante*, Armand Colin, 1911.
  23. [ ——— *La Révolution française*, t I, II et III, Armand Colin, 1922, 1924 et 1927.]
  24. [ ——— *La Réaction thermidorienne*, Armand Colin, 1929.]
  25. [ ——— *La Directoire*, Armand Colin, 1934.]
  26. Michaëlis, Edgar, *Freud, son visage et son masque*, traduit de l'allemand avec une introduction sur les éléments romantiques de la psychologie freudienne par Dr. Jankélévitch, Rieder, 1932.

27. Rank, Otto, *La Volonté du bonheur*, traduit de l'allemand par Yves Le Lay, Stock, 1934.
28. Reichenbach, Hans, *La Philosophie scientifique : vues nouvelles sur ses buts et ses méthodes*, traduction du Général Ernest Vouillemin, revue et mise à jour par l'auteur, introduction de M. Marcel Boll, Hermann & C<sup>ie</sup>, coll. « Actualités scientifiques et industrielles », n° 49, 1932.
29. Rolland, Romain, « Lénine : l'art et l'action », *Europe : revue mensuelle*, Numéro 133, 15 janvier 1934, p. 5-14.
30. [Rousseau, Jean-Jacques, *Les Confessions Les Confessions de J.-J. Rousseau*, 2 vol, Flammarion, [1907].]
31. Sade, *Idée sur les Romans*, publié avec préface, notes et documents inédits par Octave Uzanne, Edouard Rouveyre, 1878.
32. ——— *Les Crimes de l'amour*, précédé d'un avant-propos, suivi de l'*Idée sur les Romans*, de « l'auteur des *Crimes de l'amour* à Villetterque », d'une notice bio-bibliographique du Marquis de Sade : l'homme et ses écrits et du « discours prononcé par le Marquis de Sade à la section des piques », Gay et Doucé, Bruxelles, 1881.
33. ——— *Dialogue entre un prêtre et un moribond*, publié pour la première fois sur le manuscrit autographe inédit avec un avant-propos et des notes par Maurice Heine, Stendhal et Compagnie, 1926.
34. ——— *La Philosophie dans le boudoir*, Édition intégrale précédée d'une étude sur « Le Marquis de Sade et le sadisme » par Helpey (bibliographe poitevin), Édition privée, aux dépens de la « Société des études sadiques », Sadopolis, [s.d.].
35. Saurat, Denis, *Histoire des Religions*, Denoël et Steele, 1933.

36. Schlick, Moritz, *Les Enoncés scientifiques et la réalité du monde extérieur*, traduction du Général Ernest Vouillemin, revue et mise à jour par l'auteur, introduction de M. Marcel Boll, Hermann & C<sup>ie</sup>, coll. « Actualités scientifiques et industrielles », n° 152, 1934.
37. Staline, *Les Questions du léninisme*, Bureau d'éditions, 1926.
38. Whitehead, A. N., *La Science et le monde moderne*, traduit par A. d'Ivéry et P. Hollard, Payot, 1930.

## VI. おわりに

以上の掲載は、一義的にはクルヴェル全集補遺を目的とし、二義的には今後の筆者にとって、アップデート可能な基礎文献となりうることを目指した。

モレルとともに繰り返すべきは、以上はクルヴェルの読書の一端に過ぎないということである。たとえば1920年代の早い時期からフロイトに言及するクルヴェルが、リスト記載のフロイトしか読んでいないというのは、やはり考えにくい。だから本稿が提示したのはあくまでも、1930年代を中心にした読書の一端に過ぎない。

かように限定的なりストだが、「研究」を続けなければならない。これまで曲がりなりにも「理論的」著作を対象としてきたから、これからは「小説」作品を主たる対象とし、『おまえたちは狂人か』（1929年）と「エリス」、『皿に突っ込んだ足』（1933年）と「サド」について調査しようと思う。その先にはマチエの革命論がまっているだろう。

追記：本研究はJSPS 科研費 JP03J08812, JP21K20021 の助成を受けたものです。  
記して謝意を表します。ありがとうございました。